東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

『ゲーテ歌曲集』のゆくえ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-10-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村田, 千尋 メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1313

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

『ゲーテ歌曲集』のゆくえ

村 田 千 尋

はじめに

フランツ・ペーター・シューベルト Franz Peter Schubert（1797–1828）は19歳となった1816年４月に、全８巻の詩人別歌曲集を出版するという出版計画を立て、最初の２巻をヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe（1749–1832）の詩による歌曲集で飾ろうと考えた。ゲーテはシューベルトにとって特別な詩人であり（村田1997：101–112）、1821年に始まる本格的な出版活動もゲーテの歌曲が先行したということを考えると（村田1997：131–137）、ゲーテ歌曲集で開始するという選択は理解できるものである。

この最初の出版計画は友人達が焚き付け、その支援によっておこなおうというものだったので、友人グループのリーダー格で貴族の一員であったヨーゼフ・フォン・シュパウン准爵 Josef Edler von Spaun（1788–1865）が、ゲーテに宛てて出版の許可を願う手紙を書き（Deutsch 1964：40–41、村田1997：126–127、村田2004：31–33）、綺麗に清書した見本楽譜に添えてゲーテの元に送る手はずになっていた。第Ⅰ巻は確かに発送されたのだが、何の返答もなく送り返され、第Ⅱ巻にいたっては発送されることすらなく、最初の出版計画は頓挫することになる。

ゲーテが全く関心を示さなかった理由は、シューベルトの音楽がゲーテの価値観と一致しなかったという点にもあろうが、ゲーテが大変に多忙で、大量に送られてくる無名の若者からの手紙など、いちいち読んでいる時間がなかったということもその原因だと考えられる（村田1997：127–129、村田2004：34–37）。

このように不首尾に終わった出版計画ではあるが、1821年に始まる本格的な出版活動との共通点もあり、シューベルトの出版活動の出発点として、彼が目差したリートの姿を示しているという意味で重要性を持った出来事であった。

そこで本稿では、この時に作成された浄書譜を細かく検討することによって、シューベルトのリート観および出版に対する態度を明らかにしたいと思う。

なお、これら２冊の浄書譜（以下『ゲーテ歌曲集』と呼ぶことにする）については、シューベルト没後100年にあたる1928年にシューベルト研究の泰斗オットー・エーリヒ・ドイチュ Otto Erich Deutsch（1883–1967）が雑誌『音楽 Die Musik』誌上で論じ（Deutsch 1928）、さらに『新シューベルト全集 Franz Schubert. Neue Ausgabe sämtlicher Werke（NGA）』の編集主幹であるヴァルター・デュル Walther Dürr（1932–2018）も同全集「リート編」第１巻と第７巻の校訂報告書で詳細に報告した上で（Dürr 1972、Dürr 1977）、シューベルト没後150年

にあたる1978年には書籍『シューベルト研究 Schubert-Studien』への寄稿として、『ゲーテ歌曲集』が持つ意義に言及している（Dürr 1978）。しかし、残念なことに両者の記述には曖昧な点や誤りも含まれているため、本稿においてその修正も行いたい。

Ⅰ　自筆譜『ゲーテ歌曲集』の状況[1]

２冊の『ゲーテ歌曲集』の第Ⅰ巻は現在、ドイツ国立図書館 Deutsche Staatsbibliothek Berlin の所蔵であり（Mus.ms.autogr.　Schubert　1）、第Ⅱ巻は３冊に分割されてウィーン市立図書館 Wiener　Stadt-　und　Landesbibliothek（MH　117/c）とフランス国立図書館 Bibliothèque Nationale,　Paris（Ms.276/Ms.273）に所蔵されている。第Ⅱ巻は分割されるまで、"Lieder　von Goethe componirt von Franz Schubert. 2tes Heft"という表題紙が付けられていたとされており、第Ⅰ巻についても、かつては"Lieder von Goethe componirt von Franz Schubert. 1tes Heft"という表題紙があったものと推定される。この内、ベルリン本は1978年にファクシミリ版が出され（Hauschild　1978a）[2]、ベルリン本、ウィーン本、パリ本の一方（Ms.276）は電子データとして公開されている[3]。

いずれの楽譜もキースリング社 Firma　Kiesling の同一の透かし（Dürr　1977：8-12）を持ったほぼ同じ大きさの紙に書かれ、同一時期に同一目的のために作成されたと推定できる。用いられた紙は縦46㎝横64㎝の全紙を23㎝×64㎝に切り分けたもので、シューベルトはそれを二つ折りにして１頁23㎝×32㎝の紙を横長に使用している。現状の詳しい寸法を示すと、ベルリン本は22.5㎝×31.5㎝、ウィーン本は23㎝×30.5㎝、パリ本は23㎝×31㎝である[4]。

Ⅰ-1　第Ⅰ巻

第Ⅰ巻はシューベルトの没後、兄のフェルディナント・シューベルト Ferdinand　Schubert（1794-1859）が保管していたが、1844年秋、ウィーン美術工芸学校教授で彫刻家のカール・ラドニツキー Karl　Radnitzky（？-？）の仲介によってローマの音楽院長ルートヴィヒ・ランツベルク Ludwig　Landsberg（1807-58）に売却されている。この時、ランツベルクが「20フロリーン以上は出せない」と言っているというラドニツキーの手紙が残されており（Deutsch 1957：477）、ドイチュは「当時はまだ自筆譜に特別な価値がなかった」という注釈を付けている（Deutsch 1957：442）。ランツベルクの没後、1862年にベルリンの王立図書館に収められ、

1　28-29頁の付表１：「『ゲーテ歌曲集』概要」を参照願いたい。
2　『新ドイチュ目録』によると、1943年にもファクシミリ版が出版されている（Deutsch 1978：84）。
3　ベルリン本は Staatsbibliothek Berlin, Digitalisierte Sammlungen、 ウィーン本は www.schubert-online.at、パリ本は bibliothèque nationale de france gallica のサイトにおいて閲覧できる。
4　以下、１枚の紙を折った状態を「折丁 Doppelbogen」と呼び、紙をさらに半分に切り分けている場合は「単葉 Einzelblatt」と呼ぶ。折丁の一方、または単葉は「フォリオ Folio」と呼ばれる（書物の形態となった場合の１枚の紙）。したがって、折丁は２フォリオ（４頁）、単葉は１フォリオ（２頁）ということになる。

現在に至る。

前述のように過去に２回、写真版が出版されているので（Schünemann　1943；Hauschild 1978)、より新しい1978年版を使用し、電子データも適宜参照した。

Ⅰ―１―１　用紙と記入法

現状は32頁からなる。１頁目右上に鉛筆で「16ゲーテ歌曲　16　Goethe-Lieder」と書かれ、１頁目から右上（偶数頁の場合は左上）にベルリンの図書館員が記入したと思われる頁番号が鉛筆で書き込まれている（４頁、32頁は番号が振られていない)。これを「新頁番号」と呼ぶことにし、図書館員の記入とする理由は後に述べる。

32頁目まで12段の五線が、一度に五線が引ける専用のペン（ラストラール）を用いて引かれているが、ところどころ手の震えによる五線の揺らぎが見られる。本稿では、声楽パート１段とピアノ・パートの大譜表を合わせた３段を「段組」と呼ぶことにする。

各頁４段ずつの段組に計16曲が注意深く書き込まれている。ゲーテへの献呈本だから丁寧に書かれているのであろう。紙を無駄にしないように詰めて書かれているので、12段中６段（段組２段）以上使用している頁はその下を空欄としているが、３段（段組１段）だけ使用している頁はその下に多少の間を空けてから次の曲を書き始めている。

ただし、《ミニョンに An Mignon》op.19,2, D161 と《糸を紡ぐグレートヒェン Gretchen am Spinnrade》op.2, D118 の２曲には欠落がある。《ミニョンに》は最後の４小節と、本来なら書かれているはずの２番以降の歌詞が書かれておらず、《糸を紡ぐグレートヒェン》にいたっては、冒頭16小節のみが書かれているのである。このことはフェルディナントが1843/44年に記したメモでも指摘されており（《再会 Wiedersehen》D855 のフェルディナントによる筆写譜 Staatsbibliothek Berlin, Mus.ms. 20258 の表紙頁)、既に19世紀半ばから知られていた。この点については後に検討する。

また、献呈本であるにも拘わらず、《トゥーレの王 Der König in Thule》op.5,5, D367、《羊飼いの嘆きの歌 Schäfers Klagelied》op.3,1, D121、《恋人の近く Nähe des Geliebten》op.5,2, D162、《憩いなき愛 Rastlose Liebe》op.5,1, D138、《魔王 Erlkönig》op.1, D328 には書き直しの跡がある。《魔王》に見られる書き直しの多くは、1821年に出版する際に書き込んだ修正と考えられ、《恋人の近く》に見られる鉛筆による♮の書き足しも、出版時の修正と考えられる。しかし、他の３曲は当初からの修正であろう。たとえば、《憩いなき愛》では、３頁目（新頁番号23）冒頭で、E-dur の調号（♯４つ）を書いてから♯３つをナイフで削り取っている。この部分は主調の E-dur から G-dur に転調し、再び主調に戻ってくる直前の箇所であるが、間違って早めに主調の調号を書いてしまったということではないだろうか。

また、《亡霊の挨拶 Geistes-Gruß》op.92,3, D142 は小さな紙を貼り足して、末尾11小節を記入している。記入計画の見込み違いであろうか。このことから、最初の頁から順に記入していったのではないと想定できる。さらに、《魔王》は記入の際に１小節書き落としたため、当初の

付表１：『ゲーテ歌曲集』概要

凡例　　A,B,C＝(　)は歌曲集自体には書き込まれていない頁数を示す　　D＝NL は『遺作集 Nachlaß-Lieferung』を、AGA は『旧全集』を表す
E＝Z.は行数、Str.は詩節数を表す

Lieder von Goethe componirt von Franz Schubert. 1tes Heft

Deutsche Staatsbibliothek Berlin (Mus. ms. autogr. Schubert 1)

フォリオA	頁(新)B	頁(旧)C	番号	曲　　名	作曲時期	出　　版D	小節数	行＊節E	筆記状況	備　　考
(1r.)	1	9	D368	Jägers Abendlied	Anfang 1816?	op.3,4 (1821)	13T.	4Z.＊5Str.	3段＋歌詞	版刻マーク
(1v.)	2	10	D367	Der König in Thule	-April 1816	op.5,5 (1821)	34T.	4Z.＊6Str.	4段＋歌詞	修正／歌詞追記
(2r.)	3	(11)	D216	Der König in Thule (歌詞) Meeres Stille	21.Juni 1815	op.3,2 (1821)	32T.	8Z.	5段	
(2v.)	(4)	(12)		Meeres Stille (続き)						
(3r.)	5	(13)	D121	Schäfers Klagelied	30.Nov.1814	op.3,1 (1821)	61T.	4Z.＊6Str.	14段	修正／版刻マーク／NB
(3v.)	6	14		Schäfers Klagelied (続き)						
(4r.)	7	(15)		Schäfers Klagelied (続き)						
(4v.)	8	(16)		Schäfers Klagelied (続き)						
(5r.)	9	(17)	D247	Die Spinnerinn＋歌詞	Aug.1815	op.post.118,6 (1829)	11T.	4Z.＊7Str.	2段＋歌詞	
(5v.)	10	18	D257	Heidenröslein＋歌詞	19.Aug.1815	op.3,3 (1821)	16T.	7Z.＊3Str.	3段＋歌詞	
(6r.)	11	(19)	D260	Wonne der Wehmuth	20.Aug.1815	op.post.115,2 (1829)	20T.	6Z.	4段	NB
(6v.)	12	20	D224	Wandrers Nachtlied	5.Juli 1815	op.4,3 (1821)	11T.	8Z.	4段	NB
(7r.)	13	(21)	D226	Erster Verlust	5.Juli 1815	op.5,4 (1821)	22T.	4Z.＋3Z.＋2Z.	5段	
(7v.)	14	22	D225	Erster Verlust (続き) Der Fischer	5.Juli 1815	op.5,3 (1821)	18T.	8Z.＊4Str.	4段＋歌詞	版刻マーク／歌詞追記
8r.	15	23		Der Fischer (続き＋歌詞)						
8v.	16	24	D161	An Mignon	27.Febr.1815	op.19,2 (1825)	19T.	6Z.＊5Str.	4段	末尾4小節欠落　×印
(9r.)	17	(27)	D142	Geistes-Gruß Geistes-Gruß (続き)	März 16	op.92,3 (1828)別稿	25T.	4Z.＊3Str.	6段	版下ではない 貼り付け頁
(9v.)	18	28	D162	Nähe des Geliebten	27.Febr.1815	op.5,2 (1821)	10T.	4Z.＊4Str.	4段＋歌詞	×印／修正♮(鉛筆)
10r.	19	29		Nähe des Geliebten (歌詞)						
10v.	20	30	D118	Gretchen am Spinnrade	19.Okt.1814	op.2 (1821)	120T.	4Z.＊10Str.	4段	冒頭16小節のみ　9Pl
11r.	21	31	D138	Rastlose Liebe	19.Mai 1815	op.5,1 (1821)	93T.	6Z.＋8Z.＋6Z.	15段	版刻マーク
11v.	22	32		Rastlose Liebe (続き)						
12r.	23	33		Rastlose Liebe (続き)						修正♯削り落とし
12v.	24	34		Rastlose Liebe (続き)						
13r.	25	35	D328	Erlkönig	Okt.1815	op.1 (1821)	145T.	4Z.＊8Str.	28段	修正(多くは1821年？)
13v.	26	36		Erlkönig (続き)						
14r.	27	37		Erlkönig (続き)						
14v.	28	38		Erlkönig (続き)						
15r.	29	39		Erlkönig (続き)						
15v.	30	40		Erlkönig (続き)						
16r.	31	41		Erlkönig (続き)						
16v.	(32)	42		空欄(五線のみ)						

Lieder von Goethe componirt von Franz Schubert. 2tes Heft

Wiener Stadt- und Landesbibliothek (MH 117/c)

フォリオ	頁(新)	頁(旧)	番号	曲　　名	作曲時期	出　　版	小節数	行＊節	筆記状況	備　　考
1r.			D123	Sehnsucht	3.Dez.1814	NL37 (1842)	69T.	8Z.＊5Str.	20段	修正／版刻マーク
1v.				Sehnsucht(続き)						
2r.				Sehnsucht(続き)						
2v.				Sehnsucht(続き)						
3r.				Sehnsucht(続き)						
3v.			D261	Wer kauft Liebesgötter?	21.Aug.1815	NL47 (1850)	24T.	8Z.＊5Str.	4段	
4r.			D120	Trost in Tränen	30.Nov.1814	NL25 (1835)	23T.	4Z.＊8Str.	6段＋歌詞	
4v.				Trost in Tränen(続き＋歌詞)						
5r.			D258	Bundeslied	4./19.Aug.1815	Weinberger & Hofbauer (1887)	20T.	8Z.＊5Str.	5段	版刻マーク
5v.				Bundeslied(続き)						1段組のみ使用
6r.			D234	Tischlied	15.Juli 1815	op.post.118,3 (1829)	19T.	8Z.＊8Str.	4段	修正(後年)
6v.				空欄(五線のみ)						
Bibliothèque Nationale, Paris (Ms.276)										
1r.			D254	Der Gott und Bajadere Der Gott und Bajadere(続き)	18.Aug.1815	Weinberger & Hofbauer (1887)	26T.	11Z.＊9Str.	6段	版刻マーク 貼り付け頁
1v.			D119	Nachtlied＋歌詞	30.Nov.1814	NL47 (1850)	23T.	4Z.＊5Str.	2段＋歌詞	歌詞修正
2r.			D310	Sehnsucht	18.Okt.1815	AGA (1887)	39T.	12Z.	9段	
2v.				Sehnsucht(続き)						
3r.				Sehnsucht(続き)						1段組のみ使用
			D320	Der Zufriedene	—	—	—	—	—	題名のみ(抹消)
3v.			D321	Mignon	23.Okt.1815	NL20 (1832)	81T.	7Z.＊3Str.	12段＋歌詞	修正／歌詞修正
4r.				Mignon(続き＋歌詞)						
4v.				Mignon(続き＋歌詞)						
Bibliothèque Nationale, Paris (Ms.273)　＝実物未見										
1r.			D259	An den Mond	19.Aug.1815	NL47 (1850)	20T.	4Z.＊9Str.		
1v.			D255	Der Rattenfänger	19.Aug.1815	NL47 (1850)	21T.	8Z.＊3Str.		
2r.				Der Rattenfänger(続き)						
2v.			D149	Der Sänger	Febr.1815	op.post.117 (1829)	129T.	7Z.＊6Str.		
3r.				Der Sänger(続き)						
3v.				Der Sänger(続き)						
4r.				Der Sänger(続き)						
4v.				Der Sänger(続き)						
5r.				Der Sänger(続き)						
5v.				Der Sänger(続き)						
6r.				Der Sänger(続き)						
6v.				Der Sänger(続き)						

五線に継ぎ足して余白に記入した箇所がある（ラストラールではなく、ペンで五線を１本ずつ引いている）。このように、丁寧に、苦労して作成したということがわかる。

Ⅰ―１―２　頁番号の表記

先に示した図書館員によると思われる頁番号（新頁番号）以外に、鉛筆書きの数字が他に２種類見られる。まず、紙（フォリオ）を示す数字が８箇所、新頁番号のすぐ側に書かれている（15頁に８枚目を示す数字８、19頁に10、21頁に11、23頁に12、25頁に13、27頁に14、29頁に15、31頁に16＝以下、フォリオ番号と呼ぶ）。さらに９から始まるもう一つの頁番号（旧頁番号と呼ぶことにする）がこれまた新頁番号の側に42まで振られている（ただし11頁、12頁、13頁、15頁、16頁、17頁、19頁、21頁、25頁、26頁、27頁には振られていない）。なお、どの頁に数字を振られているかという点について、デュルに多少の混乱がある。

問題は旧頁番号の25頁と26頁であろう。《ミニョンに》（紙の裏面）には新頁番号16と旧頁番号24という数字が書かれているが、《亡霊の挨拶》（紙の表面）には17だけが、《恋人の近く》（紙の裏面）には18と28という数字が書かれている。つまり、１から32の新頁番号は欠落がないものの、９から42の旧頁番号は25頁、26頁が欠落しているのである[5]。25頁、26頁はまさに《ミニョンに》の欠落箇所であり、旧頁番号が振られた後、新頁番号が振られるよりも前の段階で当該フォリオが欠落していたと推定できる。

ところが、《糸を紡ぐグレートヒェン》の欠落箇所については異なる。《糸を紡ぐグレートヒェン》の冒頭頁と次に書き込まれている《憩いなき愛》の冒頭頁の旧頁番号は数字が続いており、この箇所は旧頁番号が振られるよりも更に早い段階で欠落していたことがわかる。

頁番号とは別に、《魔王》を除く全曲の冒頭にはフェルディナントの花押「Schmp」が記されている。1844年ランツベルクに売却するにあたって、自筆に間違いないことを保証したのであろう。

Ⅰ―１―３　出版時の書き込み

より興味深いのは、初版楽譜出版にあたって、版刻師がつけたと思われる印（版刻印）であろう。《狩人の夕べの歌 Jägers Abendlied》op.3,4, D368、《羊飼いの嘆きの歌》op.3,1、《漁師 Der Fischer》op.5,3, D225、《憩いなき愛》op.5,1 には、赤鉛筆または黒鉛筆で×印、あるいは数字が書き込まれている。これらの記号は初版譜における段組や頁の変わり目の状況と一致しており、『ゲーテ歌曲集』の浄書譜が初版出版の際の版下として用いられたことは明らかである。

いっぽう、《トゥーレの王》op.5,5 と《漁師》には２番以降の歌詞の冒頭が鉛筆で追記されている。シューベルトの親しい友人であり、1821年の出版に際して重要な働きをしたレオポルト・フォン・ゾンライトナー Leopold von Sonnleithner（1797–1873）の筆跡とデュルは推定

5　実際には数字が書かれていない場合も、書かれていると見なして数えるが、25頁、26頁はそれに相当する頁がない。

している（Dürr 1978：46）。

そして《羊飼いの嘆きの歌》、《悲しみの喜び Wonne der Wehmuth》D260、《旅人の夜の歌 Wanderers Nachtlied》op.4,3, D224 の３曲には「注意せよ」を意味する「NB」（Notabene）の記号が書かれている。《羊飼いの嘆きの歌》には他の修正もあるため、「修正箇所に気をつけよ」の意味とも取れるが、《悲しみの喜び》と《旅人の夜の歌》は「NB」のみが書かれているため、何に対して注意を促しているのかはわからない。

さらに《ミニョンに》op.19,2、《恋人の近く》op.5,2 には冒頭、題名の横に黒鉛筆による×印が書き込まれている。これは明確な版刻印とは言えないが、おそらく、出版の際に付けられた印であろう。

また《糸を紡ぐグレートヒェン》には題名の右横に黒鉛筆による「9Pl」という書き込みがある。先にも述べたように、《糸を紡ぐグレートヒェン》には楽譜の大幅な欠落があり、デュルは総頁数が９頁になることを出版社に伝える書き込みではないかと推定している（Dürr 1978：49）。これは、次のことを考慮すると納得がいく推測である。《糸を紡ぐグレートヒェン》にはウィーン市立図書館所蔵の自筆譜（MH69）も存在し、それは８頁の紙束からなっている。１頁目には冒頭の19小節が記載され、楽譜は７頁まで続く（８頁目は五線のみ）。ベルリン本『ゲーテ歌曲集』の《糸を紡ぐグレートヒェン》において１頁目に書かれているのは16小節であり、多少ゆったり書いたのだとすれば、全部で９頁となることに矛盾はない。このように考えると、《糸を紡ぐグレートヒェン》の欠落は、旧頁番号の書き込みどころか、初版出版よりも前に起こったと推定することができる。

以上のように、第Ⅰ巻16曲中13曲は1821年から始まる出版活動において、初版に対する版下となったということがわかる。版刻印のない他の曲も恐らく同じであろう。ただし、幾つかの例外がある。《糸を紡ぐ女 Die Spinnerin》D247 と《悲しみの喜び》はシューベルトの生前には出版されず、没後に遺作 op.post（1829年）として出版された曲である。

《亡霊の挨拶》は別稿（第６稿）が op.19 として出版されているので、『ゲーテ歌曲集』は版下とならなかった。《亡霊の挨拶》は第５稿までは冒頭がレチタティーヴォであったのに対し、出版された第６稿ではレチタティーヴォの表記がなく、変更点が大きかったため、版下として利用しなかったのであろう。これに対して、《魔王》も幾つかの小節を追加したり、音型を変更したりしているが、基本的な流れはほぼ同一で修正による対応が可能な範囲であったので、版下として用いることができたのである。

Ⅰ―２　第Ⅱ巻

第Ⅱ巻には12曲が収録されている。シューベルト生前の出版はなく、２曲が op.post（1829年）として、７曲は『遺作歌曲集 Nachlaß-Lieferung』（1832-50年）として、いずれもウィーンの出版社であるアントン・ディアベリ Anton Diabelli（1781-1858）から出版された。また２曲はウィーンの出版社ワインベルガー・ホフバウアー Weinberger & Hofbauer（1887年）

から出版され、残る１曲は『旧シューベルト全集Franz Schubert's Werke. Kritisch durchgesehene Gesammtausgabe（AGA）』（1887年）に掲載されている。

第Ⅱ巻の楽譜はシューベルトの没後、兄フェルディナントによって保管されていたが、『遺作歌曲集』出版のためにディアベリの手に渡り、その没後、ワインベルガー・ホフバウアー社の所有となったものと思われる。『旧シューベルト全集』の編集者オイゼビウス・マンディチェフスキー Eusebius Mandyczewsky（1857–1929）は、それが後に切り売りされてしまったと述べている（Mandyczewsky 1897：14）。先にも述べたように、"Lieder von Goethe componirt von Franz Schubert. 2tes Heft"と書かれた表紙が存在したが、３分冊にされる段階で消失した。

３分冊の一部（５曲）は1889年に競売に付され、ウィーンの実業家で芸術愛好家ニコラウス・フォン・ドゥンバ Nikolaus von Dumba（1830–1900）の所有となり、彼の没後、1900年にウィーン市立図書館に収蔵された（電子データ使用）。残り７曲は売り立てが上手くいかず、何回か競売に付された後、ヴァイオリニストでパリ音楽院の図書館員シャルル・マレーブ Charles Malherbe（1853–1911）が1893年と99年の２回に分けて購入し、パリの国立図書館に所蔵されることになった（パリ音楽院の所蔵印とマレーブの所蔵印が押されている）。そのため、２種類の所蔵番号（Ms273 と Ms276）を持っている（Ms276 は電子データを使用したが、Ms273 はGallicaに登録されていない模様で、未見。デュルの記述に従っている。Dürr 1977、Dürr 1978）。

既に述べたように、用紙は第Ⅰ巻と同一と思われるが、頁番号ではなく、フォリオ番号が各紙片表面の右上に鉛筆で記入されている。第Ⅰ巻と同様に紙を横長に使用し、ラストラールを用いてそれぞれ12段が引かれ、ここでもやはり手の震えが見られる。

Ⅰ―２―１　修正

貼り付け頁の存在と修正跡、追加五線の存在も第Ⅰ巻と同じである。

パリ本（Ms276）の１頁目には高さがほぼ半分で６段の五線が引かれた紙片が糊付けされ、《神と舞姫 Der Gott und die Bajadere》D254 末尾の８小節が記入されている（裏面は空欄）。

《夜の歌 Nachtgesang》D119 と《ミニョン Mignon（Kennst du das Land）》D321 には歌詞の書き直しが見られる。

《あこがれ Sehnsucht（Nur wer die Sehnsucht kennt）》D310 の楽譜末尾にはわざわざ〈Göthe〉と記されている。『ゲーテ歌曲集』であるにも拘わらず改めて詩人名を書き込むことは不思議ではあるが、これ以上の想像は差し控えたい。

《ミニョン》では４枚目裏（８頁）４段目末尾を斜線で抹消し、７段目に新たに記入している。また、４枚目表（７頁）７段目に手書きによる延長五線を書き足し（歌唱声部のみ）、残る２小節を延長五線に書き込もうとしたが、すぐに諦めて空欄のまま残し、10–12段目に改めて記入している。

パリ本（Ms276）でもっとも興味深いのは、３枚目表（５頁）の状況であろう。この頁にはクリスティアン・ルートヴィヒ・ライシッヒ Christian Ludwig Reissig（1783–1822）の《満足

した男 Der Zufriedene》D320の題名、パート名、声楽パートの音部記号、調号、拍子記号、テンポが一旦書き込まれ、斜線で消されている。書き始めようとしてから、ゲーテの詩でないことに気付いたのだろう。

ウィーン本の《盟約の歌 Bundeslied》D258は２番以降の歌詞が書かれておらず、楽譜が終わった後の五線９段が空欄になっている。これは他には見られないことで、《盟約の歌》の歌詞を書き込むつもりのスペースではないかという推測ができる。

続く《宴席の歌 Tischlied》D234では15小節目の４分音符を３連符の下降順次進行に鉛筆で変更しているが、これは浄書譜作成当初ではない可能性もある。また、《宴席の歌》に続く12頁目が五線だけの空欄となっており、ここも《宴席の歌》の２番以降の歌詞を書くためのスペースだった可能性がある。

Ⅰ―２―２　版刻印

第Ⅱ巻における版刻印は《神と舞姫》、《あこがれ Sehnsucht（Was zieht mir das Herz so?》D123、《盟約の歌》に見られる。しかし、既に述べたようにいずれもシューベルト生前の出版ではないため、ここではその存在を指摘するに留めたい。

また、第Ⅰ巻のほとんどの曲に記されていたフェルディナントの花押は第Ⅱ巻には見られない。フェルディナントが渡した相手がディアベリであり、自筆の証明を必要としていなかったからだと考えることができるように思う。

以上を総合すると、第Ⅰ巻に比べ、第Ⅱ巻の方が完成度がやや低いようにも思われる。

なお、第Ⅱ巻のウィーン本（MH117）およびパリ本（Ms276）は右上に鉛筆によるフォリオ番号がそれぞれ１から振られている（司書による）。パリ本（Ms273）のフォリオ番号についてデュルはなにも述べていないので不明であるが、恐らく同様であろう。

Ⅱ　伝承の経緯

このように、同じ時に同一の紙を用いて作成された楽譜ではあるが、その後に辿った経緯は大きく異なる。先にも述べたように、第Ⅰ巻はゲーテに送付したが返送され、第Ⅱ巻は送付すらされていない。しかし、いずれもシューベルトが亡くなるまでは彼の手元に残されていたと考えられる。既に、伝承に関わる問題点にも触れてきたが、ここで改めて整理しておきたい[6]。

Ⅱ―１　『ゲーテ歌曲集』の誕生

『ゲーテ歌曲集』全２巻は1816年春、いずれもゲーテに献呈することを目的に作成された。

6　35頁の付表２：「『ゲーテ歌曲集』クロニクル」を参照されたい。

当初、第Ⅰ巻は42頁、第Ⅱ巻は32頁あったと考えられるが、さらに多かった可能性も否定できない。いずれにも、頁番号、フォリオ番号ともに振られていなかったことは確実である。

さて、ここで問題になるのは、第Ⅱ巻は何のために作られたのか、あるいはなぜゲーテの元に送られなかったのかということである。これについては推測するしかないのだが、第Ⅱ巻が第Ⅰ巻に比べて完成度が低かったため送るのを諦めたのかもしれない。第Ⅱ巻の修正の量や、ライシッヒの曲が紛れ込んでいること等から考えられる。あるいは、シュパウンが「1冊を送る」とはっきり書いているように、まず第Ⅰ巻を送り、ゲーテの反応を見て第Ⅱ巻を送るつもりだったのかもしれない。有節歌曲である《盟約の歌》や《宴席の歌》において2番以降の歌詞を書くスペースをとっておきながら実際には書き込まなかったということがそれを示唆している。これらの歌詞は、後に書き入れるつもりだったのかもしれない。

Ⅱ―2　シューベルトの死まで

1816年春に作成された歌曲集は、ゲーテの元に送りながらも返送された第Ⅰ巻、ゲーテの元に送りさえしなかった第Ⅱ巻、いずれもシューベルトの手元に保管されることになった。あるいは親しい友人の一人、ヨーゼフ・ヒュッテンブレンナー Josef Hüttenbrenner（1796–1882）が整理をしていてくれたのかもしれない（村田1997：132–133、村田2004：81–83）。

ところが本格的な出版活動が始まる1821年までのいずれかの時期に、《糸を紡ぐグレートヒェン》2頁目以降が失われてしまった。その理由と時期は想像すらできない。しかし、当初の第Ⅰ巻は50頁あった可能性が高く、失われた代わりに「9Pl」という記入がされたと考えることができるだろう。

1821年に本格的な出版活動が始まり、最初の年に op.8 までが出版されている。第Ⅰ巻に含まれる16曲中12曲がこのときに出版され、出版に際しての修正（《魔王》）や版刻印（例えば《漁師》など）、歌詞2番の冒頭（例えば《トゥーレの王》など）が加えられ、版下として使用された。ただし、《糸を紡ぐグレートヒェン》だけはすでに欠落が生じていたため、版下とはならなかった[7]。

第Ⅰ巻に旧頁番号が振られたのは《糸を紡ぐグレートヒェン》の欠損以降、1825年以前であることは確かだが、1821年の出版活動との前後関係は不明である。

1825年には op.19 が出版され、『ゲーテ歌曲集』第Ⅰ巻からは《ミニョンに》が版下として利用されている。しかし印刷のごたごたに紛れてのことだろうか、《ミニョンに》の末尾1フォリオが消失したと想像される。

冒頭8頁も消失してしまったが、旧頁番号の記入以降であることは明白だとしても、この年代を明らかにすることは難しい。

1828年には《亡霊の挨拶》が op.92,3 として出版されたが、それは修正を重ねた別稿（第6

7　《糸を紡ぐグレートヒェン》のウィーン自筆譜（MH69）は出版譜と微妙な差異があり、これも出版の際の版下ではない。

付表２：『ゲーテ歌曲集』クロニクル

年	時期	出来事	詳細	資料
1816	春	Goethe-Heft（Ⅰ・Ⅱ）作成	Ⅰ＝42頁？（頁番号無し）　Ⅱ＝32頁？	
1816	17.April	Ⅰをゲーテに送付	シュパウンの手紙→返送　Ⅱは発送もされず	Deutsch 1964: 40f.
?		Gretchen am Spinnrade 2頁目以降欠落		
1821	2.April	op.1出版	D328 Erlkönig Ⅰ	
1821	30.April	op.2出版	D188 Gretchen am Spinnrade Ⅰ	
1821	29.Mai	op.3出版	D121 Schäfers Klagelied Ⅰ／D216 Meeres Stille Ⅰ／D257 Heidenröslein Ⅰ／ D368 Jägers Abendlied Ⅰ／D367 Der König in Thule Ⅰ	
1821	29.Mai	op.4出版	D224 Wandrers Nachtlied Ⅰ	
1821	9.Juli	op.5出版	D138 Rastlose Liebe Ⅰ／D162 Nähe des Geliebten Ⅰ／D225 Der Fischer Ⅰ／ D226 Erster Verlust Ⅰ	
1825	6.Juni	op.19出版	D161 An Mignon Ⅰ／（D369 An Schwager Kronos）／（D544 Ganymed）	
?		Ⅰ　旧頁番号付け	42頁	
?		An Mignon末尾の欠落		
1828	11.Juli	op.92出版	（D142 Geistes-Gruß別稿）／（D543 Auf dem See）／（D764 Der Musensohn）	
1828	19.Nov.	シューベルトの死		
1829	16.Juni	op.post.115出版	D260 Wonne der Wehmuth Ⅰ	
1829	19.Juni	op.post.117出版	D149 Der Sänger Ⅱ	
1829	19.Juni	op.post.118出版	D234 Tischlied Ⅱ／D247 Die Spinnerinn Ⅰ	
1830	10.Juli	Nachlaß-Lieferungの出版開始	NL1（D534 Die Nacht）	
1832	22.Dez.	NL20出版	D321 Mignon Ⅱ／（D126 Szene aus "Faust"）	
1835	9.Okt.	NL25出版	D120 Trost in Tränen Ⅱ	
1838		NL30出版	（D210 Die Liebe）	
1842	23.Juni	NL37出版	D123 Sehnsucht Ⅱ	
1843	Sept.	フェルディナントの書き込み	書き込み時期不明　順番違い　An Mignon, Gretchen am Spinnrade欠落あり	D855筆写譜mus.ms.20258
1844		ラドニツキーの仲介	手紙25.Sept.	Deutsch 1957: 477
1844	秋	フェルディナントⅠをランツベルクに売却	20fl.	
1850	Frühjahr	NL47出版	D261 Wer kauft Liebesgötter? Ⅱ／D119 Nachtgesang Ⅱ／D259 An den Mond Ⅱ／ D255 Der Rattenfänger Ⅱ	
?		Weinberger & HofbauerがⅡを入手		
1858		ランツベルクの死		
1859	26.Ferb.	フェルディナントの死		
1862	13.März	Ⅰをベルリン王室図書館が入手	mus.ms.autogr.Schubert 1　新頁番号	
1872		（Gotthard　D359 Sehnsucht出版）		
1887		Weinberger & Hofbauer	D258 Bundeslied Ⅱ／D254 Der Gott und Bajadere Ⅱ出版	
1887		FriedlaenderⅦ	出版　D256 Der Schatzgräber	
1887		マンディチェフスキーがⅡを確認	Weinberger & Hofbauerにて	Mandyczewsky 1897: 14
1887		Ⅱ J.P.Brackesへ？	ⅡWienのみ？	
1889	18.Febr.	ⅡWien競売J.M.Heberle	Nikolaus Dumbaの所有	
1889	3.Juni	ⅡParis競売J.A.Stargardt	競売不調？	
1892	7.Nov.	ⅡParis競売Liepmannssohn	競売不調？	
1893		ⅡParis　Charles Malherbe	パリ音楽院の所有　Ms.273	
1899	Febr.	ⅡParis　Charles Malherbe	パリ音楽院の所有　Ms.276	
1900	23.März	ⅡWien　ウィーン市立図書館の所有	Dumbaの死に伴う　MH117/c	

稿）であったため、『ゲーテ歌曲集』に含まれる浄書譜は版下とならなかった。

Ⅱ―3　フェルディナントの死まで

1828年11月19日にシューベルトが亡くなると、遺品楽譜は兄のフェルディナントによって管理された。

ウィーンの出版業者ディアベリは1829年に、《食卓の歌》op.post.118,3、《悲しみの喜び》op.post.115,2、《歌人 Der Sänger》op.post.117, D149、《糸を紡ぐ女》op.post.118,6 の 4 曲を遺作番号付きとして出版した。このときも『ゲーテ歌曲集』の浄書譜が版下として利用されたと考えられる。そして《悲しみの喜び》と《糸を紡ぐ女》によって第Ⅰ巻の全曲が出版されたため、第Ⅰ巻はフェルディナントの手元に戻されることになった。ここから、第Ⅰ巻と第Ⅱ巻は異なる運命を辿ることになる。

ディアベリは一連の「遺作番号付き」を出版した後、1829年から50年にかけて、『遺作歌曲集』全50巻を出版した。その中には、《ミニョン》NL20, D321、《涙の中の慰め Trost in Tränen》NL25, D120、《あこがれ》NL37, D123、《愛の神を買うのは誰か Wer kauft Liebesgötter?》NL47, D261、《夜の歌》NL47, D119、《月に寄せて An den Mond》NL47, D259、《ねずみ取り Der Rattenfänger》NL47, D255 の 7 曲が収められ、『ゲーテ歌曲集』が版下として用いられている。つまり、この段階で第Ⅱ巻はディアベリの手元に預けられていたと考えるのが妥当だろう。

すでに述べたように1844年秋、フェルディナントは第Ⅰ巻をランツベルクに売却した。フェルディナントは売却内容を歌曲《再会》の筆写譜表紙に書き留めており、その全貌がわかるのだが、フェルディナントが書き記した曲順と、『ゲーテ歌曲集』第Ⅰ巻の現状に異同が見られるため、これまで多少の混乱があった。これについては次章で述べることにする。

その後、第Ⅰ巻はランツベルクの手元にあったはずだが、1858年にランツベルクが亡くなり、翌59年にフェルディナントが亡くなると、1862年にベルリン王室図書館が入手し、現在の「Mus. ms.autogr.Schubert　1」という所蔵番号が割り振られた。そして、１から32までの新頁番号とそれに対応するフォリオ番号が振られている（ベルリン国立図書館に納められている他の手稿譜に書かれた頁番号やその他の記号と筆跡や書き方が似ているので同図書館司書が記入したと推定できる）。

Ⅱ―4　フェルディナントの没後

第Ⅰ巻はこうしてベルリンに安住の地を見いだすことになるが、第Ⅱ巻はむしろフェルディナントの没後に動いた。

前述の通り、『遺作歌曲集』出版のためにディアベリに預けてあった第Ⅱ巻は、ディアベリの死後（1858）、彼の後継者の手元にあったと考えられるが、1887年頃ワインベルガー・ホフバウアー社の手に渡った。同社はその年のうちに《盟約の歌》と《神と娼婦》を出版しており、『ゲーテ歌曲集』で最後に残った１曲《あこがれ》D310 も『旧シューベルト全集（AGA）』に

収録された。

収録されているすべての曲が出版された第Ⅱ巻は、ここで３分割されることになる。そのうち１冊は1889年に競売にかけられ、ドゥンバが競り落としている。そしてドゥンバの死に伴い、1900年にはウィーン市立図書館の管轄下に移り、「MH117/c」という整理番号が与えられて現在に至っている。

残る２冊の競売はやや難航したようであるが、２冊ともマレーブが競り落とし（1893年と99年）、パリ音楽院図書館を経て現在はパリ国立図書館の所蔵となっている（Ms.273 および Ms.276）。

Ⅲ　『ゲーテ歌曲集』の復元

本稿の次の課題として、『ゲーテ歌曲集』の本来の姿を復元してみたいと思う。ただしこの試みは、あくまでも推測の域を出ないものである。

Ⅲ―１　第Ⅰ巻の復元　　Ⅲ―１―１　欠落曲の推定

すでに述べたように、第Ⅰ巻には冒頭８頁と、《ミニョンに》に続くフォリオ（《ミニョンに》の末尾が書かれていたはずである）、そして《糸を紡ぐグレートヒェン》の２頁目以降、計３箇所に欠落が見られる。しかし、ゲーテの元に送付したということを考えると、《ミニョンに》も《糸を紡ぐグレートヒェン》も当初は完全原稿であったろうことが容易に想像できる。

では、冒頭８頁には何が書かれていたのだろうか。それを知る手がかりはほとんどないが、当時（1816年４月まで）すでに作曲されてはいても『ゲーテ歌曲集』に掲載されていないゲーテ歌曲９曲を候補とすることができるであろう[8]。もちろん、現在では失われてしまった曲が書かれていた可能性も否定できないが、本稿でそれに言及することは有意義でないと考える。

最初に候補から外すことができるのは《狩人の夕べの歌 Jägers Abendlied》D215、《海の静寂 Meeres Stille》D215A、《あこがれ Sehnsucht（Nur wer die Sehnsucht kennt》D359 の３曲である。シューベルトは生前に同一曲を重ねて出版したこと、２回目以降の出版において改訂を加えたことはあるが、同一歌詞に対する異なる作曲を出版したことはない。ましてや同一曲集に同一歌詞に対する異なる作曲を掲載するとは考えにくいのではないだろうか。従って、これらの３曲を除くと、《ファウストからの情景 Szene　aus　”Faust”》D126、《川面にて Am Flusse》D160、《愛 Die Liebe》D210、《宝探し Der Schatzgräber》D256、《竪琴弾き Harfenspieler》D325、《御者クロノスに An Schwager Kronos》D369 の６曲が候補ということになる。

冒頭８頁の候補曲としてドイチュは根拠は示さずに《御者クロノスに》か《ファウストから

8　38頁の付表３：「『ゲーテ歌曲集』未掲載のゲーテ歌曲」を参照願いたい。

付表３：『ゲーテ歌曲集』未掲載のゲーテ歌曲（1816年４月以前）

曲名／D番号	作曲年	初版	自筆譜	備考
《ファウストからの情景 Szene aus "Faust"》D126	12.Dez.1814	NL20 22.Dez.1832	Staatsbibliothek Berlin Mus.ms.autogr. Schubert, F. 9	6頁
《川面にてAm Flusse》D160	27.Febr.1815	AGA 1887	Staatsbibliothek Berlin Mus.ms. autogr. Schubert 28	1頁＋2段 下書き（An Mignon D161, Nähe des Geliebten D162と一緒）
《愛Die Liebe》D210	3.Juni 1815	NL30 1838	GdM A215	21小節
《狩人の夕べの歌 Jägers Abendlied》第１作 D215	20.Juni 1815	Die MusikⅥ 1906/07	Wienbibliothek im Rathaus MH 16218	1頁
《海の静寂Meeres Stille》 第１作D215A	20.Juni 1815	NGA	Wienbibliothek im Rathaus MH 16218	1頁 従来はD216の 初稿と見なされてきた
参考 （《ヴィラ・ベッラの クラウディーネ Claudine von Villa Bella》 D239）	26.Juli 1815–	―	―	参考＝ジングシュピール
《宝探しDer Schatzgräber》 D256	19.Aug.1815	FriedlaenderⅦ 1887	UB Lund, Slg.Taussig	46小節
《竪琴弾きHarfenspieler》 第１作D325	13.Nov.1815	AGA 1887	Wienbibliothek im Rathaus MH78/79	2頁＋1段
《あこがれSehnsucht》第２作 D359	1816	Gotthard 1872	消失	45小節
《御者クロノスに An Schwager Kronos》D369	1816	op.19,1 6.Juni 1825	消失	140小節

の情景》と推測し（Deutsch 1964：41）、デュルは記載されているのが１曲ならばと断りながら、手稿譜８頁分にふさわしい長さを持っていること、後に《ミニョンに》と一緒に op.19 として出版されたことを根拠として《御者クロノスに》であろうとしている（Dürr 1978：48）。

《ファウストからの情景》は100小節であり、音の詰まり具合から見てもサイズ不足（ベルリンの自筆譜 Mus.ms.autogr. Schubert, F. 9 は６頁）と思われる。そしてデュルはグレートヒェン、悪霊、合唱の対話という構成が他の掲載曲と様式的に異なることも指摘している（Dürr 1978：48）。いっぽう《御者クロノスに》は140小節あり、音の詰まり具合から見ても手稿譜８頁にふさわしい。

かりに複数曲掲載の可能性を考えると、《川面にて》は30小節＋歌詞、《愛》は21小節、《宝探し》は46小節＋歌詞、《竪琴弾き》は40小節であり、全曲合わせても８頁には満たないであろうと推測される。

残る可能性は《ファウストからの情景》と他１曲ということになり、《ファウスト》と《川面にて》という組み合わせも考え得るが、デュルの指摘を支持したい。

したがって、ドイチュ、デュルと同じく《御者クロノスに》が記載されていたと推測する。

次の欠落箇所、《ミニョンに》の末尾４小節と２番以降の歌詞が書かれたフォリオ（旧25、26頁）は1825年の出版に際して欠落したと思われる。ここに何が書かれていたのかデュルは推測できないとしているが（Dürr 1978：48）、欠落した４小節と６行からなる歌詞４節分も書かれていたはずなので、続くフォリオ表面は《ミニョンに》の楽譜と歌詞で埋められていたと考えられる。残るは１頁分に限られ、先に挙げた候補曲のなかで歌詞も含めて１頁に収まるのは《愛》だけのように思われるが、《ミニョンに》、《恋人の近く》と同じ紙にスケッチ（mus.ms.autor.

Schubert 28）が描かれている《川面にて》も捨てがたい。あるいは、《ミニョンに》の歌詞で埋められていた可能性もある。そしてもちろん、冒頭８頁も含めて、現在は失われてしまった未知の曲が書かれていた可能性も残るので、あくまでも推測に過ぎない。

仮に冒頭８頁が《御者クロノスに》であったとするならば、この曲も、もう一つの欠落である《ミニョンに》も、いずれも op.19 として出版された曲である。《ミニョンに》には版刻印こそないが、題名横に鉛筆で×印が書き込まれており、版下として使われた可能性が高い。そこから、冒頭８頁の散逸も op.19 出版の過程で起きた可能性が考えられる。

最も早い段階で欠落したと思われる《糸を紡ぐグレートヒェン》は当初９頁あったと思われ、「9Pl」という記入がそれを物語っている。欠けている頁に他の曲も書かれていたという可能性はほとんどない。

Ⅲ―１―２　フェルディナントの曲順の矛盾[9]

フェルディナントは《再会》D855 の筆写譜を1843年９月に作成し（mus.ms.20258）、その表紙にランツベルクに売り渡した自筆譜の一覧を書き込んでいる（記入時期は不明）。全21件の中で第19番が当該の『ゲーテ歌曲集』である。フェルディナントは《ミニョンに》と《糸を紡ぐグレートヒェン》の欠落についても言及しているが、彼が書き出した曲順が現在知られているものと相異しているところに問題がある。つまり、現在の曲順《狩人の夕べの歌》、《トゥーレの王》、《静かな海 Meeres Stille》op.3,2, D216、《羊飼いの嘆きの歌》、《糸を紡ぐ娘》、《野ばら Heidenröslein》op.3,3,　D257、《悲しみの喜び》、《旅人の夜の歌》、《最初の喪失 Erster Verlust》op.5,4, D226、《漁師》、《ミニョンに》、《亡霊の挨拶》、《恋人の近く》、《糸を紡ぐグレートヒェン》、《憩いなき愛》、《魔王》に対して、フェルディナントは《亡霊の挨拶》、《恋人の近く》、《糸を紡ぐグレートヒェン》、《最初の喪失》、《漁師》、《ミニョンに》、《悲しみの喜び》、《旅人の夜の歌》、《狩人の夕べの歌》、《トゥーレの王》、《静かな海》、《羊飼いの嘆きの歌》、《糸を紡ぐ女》、《野ばら》、《憩いなき愛》、《魔王》の順で記しているのである（フェルディナントの曲順は旧頁番号と一致しない）。

デュルはフェルディナントの記述順を「当初の曲順」としており（Dürr 1978：47）、そこに丁合の矛盾はない。しかし、時系列には大きな矛盾がある。旧頁番号 1–42 は《ミニョンに》に続く欠落した２頁にも振られていたはずである。したがって 1–42 の頁番号は欠落以前に振られていたと考えられる。しかしフェルディナントは《ミニョンに》が欠落していると記載している。つまり、フェルディナントが書き込みを行ったときにはすでに旧頁番号が振られていたはずである。もし、フェルディナントの書き込みが曲順を示しているのだとすれば、フェルディナントが一覧を書く前に誰かが頁順の組み替えを行い、後に戻したということになってしまう。すなわち、フェルディナントの記述は曲順を表したものではないということになろう。

9　40–41頁の図：「『ゲーテ歌曲集』丁合復元図」を参照願いたい。

図：『ゲーテ歌曲集』丁合復元図

Lieder von Goethe componirt von Franz Schubert. 1tes Heft
Deutsche Staatsbibliothek Berlin (mus.ms.autogr. Schubert 1)

推定フォリオ	旧頁	記載フォリオ	新頁		
1r.	1			？ An Schwager Kronos D369	（現状は欠落）
1v.	2			？ An Schwager Kronos（続き）	（現状は欠落）
2r.	3			？ An Schwager Kronos（続き）	（現状は欠落）
2v.	4			？ An Schwager Kronos（続き）	（現状は欠落）
3r.	5			？ An Schwager Kronos（続き）	（現状は欠落）
3v.	6			？ An Schwager Kronos（続き）	（現状は欠落）
4r.	7			？ An Schwager Kronos（続き）	（現状は欠落）
4v.	8			？ An Schwager Kronos（続き）	（現状は欠落）
5r.	9		1	Jägers Abendlied D368 ＋歌詞	
5v.	10		2	Der Konig in Thule D367	
6r.	11		3	Der Konig in Thule（歌詞） ／ Meeres Stille D216	
6v.	12		4	Meeres Stille（続き）	
7r.	13		5	Schäfers Klagelied D121	
7v.	14		6	Schäfers Klagelied（続き）	
8r.	15		7	Schäfers Klagelied（続き）	
8v.	16		8	Schäfers Klagelied（続き）	
9r.	17		9	Die Spinnerinn D247 ＋歌詞	
9v.	18		10	Heidenröslein D257 ＋歌詞	
10r.	19		11	Wonne der Wehmuth D260	
10v.	20		12	Wandrers Nachtlied D224	
11r.	21		13	Erster Verlust D226	
11v.	22		14	Erster Verlust（続き） ／ Der Fischer D225	
12r.	23	8	15	Der Fischer（続き） ＋歌詞	
12v.	24		16	An Mignon D161（現状は4小節欠落）	
13r.	25			An Mignon（続き） ＋歌詞？	（現状は欠落）
13v	26			？ Die Liebe D210	（現状は欠落）
14r.	27		17	Geistes-Gruß D142 ＋（続き） 貼り付け紙	
14v.	28		18	Nähe des Geliebten D162	
15r.	29	10	19	Nähe des Geliebten（歌詞）	
15v.	30		20	Gretchen am Spinnrade D118（現状は1頁目のみ）	
16r.				Gretchen am Spinnrade（続き）	（現状は欠落）
16v.				Gretchen am Spinnrade（続き）	（現状は欠落）
17r.				Gretchen am Spinnrade（続き）	（現状は欠落）
17v.				Gretchen am Spinnrade（続き）	（現状は欠落）
18r.				Gretchen am Spinnrade（続き）	（現状は欠落）
18v.				Gretchen am Spinnrade（続き）	（現状は欠落）
19r.				Gretchen am Spinnrade（続き）	（現状は欠落）
19v.				Gretchen am Spinnrade（続き）	（現状は欠落）
20r.	31	11	21	Rastlose Liebe D138	
20v.	32		22	Rastlose Liebe（続き）	
21r.	33	12	23	Rastlose Liebe（続き）	
21v.	34		24	Rastlose Liebe（続き）	
22r.	35	13	25	Erlkönig D328	
22v.	36		26	Erlkönig（続き）	
23r.	37	14	27	Erlkönig（続き）	
23v.	38		28	Erlkönig（続き）	
24r.	39	15	29	Erlkönig（続き）	
24v.	40		30	Erlkönig（続き）	
25r.	41	16	31	Erlkönig（続き）	
25v.	42		32	空欄（五線のみ）	

Lieder von Goethe componirt von Franz Schubert. 2tes Heft

Wiener Stadt- und Landesbibliothek (MH 117/c)

推定フォリオ	記載フォリオ	
1r.	1	Sehnsucht D123
1v.		Sehnsucht (続き)
2r.	2	Sehnsucht (続き)
2v.		Sehnsucht (続き)
3r.	3	Sehnsucht (続き)
3v.		Wer kauft Liebesgötter? D261
4r.	4	Trost in Tränen D120
4v.		Trost in Tränen (続き)＋歌詞
5r.	5	Bundeslied D258
5v.		Bundeslied (続き) ＋歌詞？(現状は9段空欄)
6r.	6	Tischlied D234
6v.		空欄(五線のみ)　Tischlied (歌詞)？

Bibliothèque Nationale, Paris (Ms.276)

7r.	1	Der Gott und Bajadere D254 ＋(続き) 貼り付け紙
7v.		Nachtlied D119
8r.	2	Sehnsucht D310
8v.		Sehnsucht (続き)
9r.	3	Sehnsucht (続き) ／ Der Zufriedene D320 (題名のみ＝抹消)
9v.		Mignon D321
10r.	4	Mignon (続き)
10v.		Mignon (続き)

Bibliothèque Nationale, Paris (Ms.273)

11r.	(1)	An den Mond D259
11v.		Der Rattenfänger D255
12r.	(2)	Der Rattenfänger (続き)
12v.		Der Sänger D149
13r.	(3)	Der Sänger (続き)
13v.		Der Sänger (続き)
14r.	(4)	Der Sänger (続き)
14v.		Der Sänger (続き)
15r.	(5)	Der Sänger (続き)
15v.		Der Sänger (続き)
16r.	(6)	Der Sänger (続き)
16v.		Der Sänger (続き)

以上から、《御者クロノスに》、《狩人の夕べの歌》、《トゥーレの王》、《静かな海》、《羊飼いの嘆きの歌》、《糸を紡ぐ娘》、《野ばら》、《悲しみの喜び》、《旅人の夜の歌》、《最初の喪失》、《漁師》、《ミニョンに》、《愛》？、《亡霊の挨拶》、《恋人の近く》、《糸を紡ぐグレートヒェン》、《憩いなき愛》、《魔王》という当初の曲順が想定できるのではないだろうか。

Ⅲ―２　第Ⅱ巻の曲順

第Ⅱ巻の曲順にも疑問がある。『旧シューベルト全集』の監修者であったマンディチェフスキーは『旧全集』の校訂報告において、ワインベルガー・ホフバウアー社にて『ゲーテ歌曲集』第Ⅱ巻の存在を確認したことを延べ、《あこがれ》D123、《誰が愛の神を買うのか？》、《涙の中の慰め》、《神と舞姫》、《夜の歌》、《あこがれ》D310、《ミニョン》、《盟約の歌》、《宴席の歌》、《月に寄せて》、《ねずみ取り》、《歌い手》の順に曲を列挙している（Mandyczewsky 1897：14）。デュルもこれに従っているのだが（Dürr 1978：52）、現ウィーン本を構成する《あこがれ》D123、《誰が愛の神を買うのか？》、《涙の中の慰め》と《盟約の歌》、《宴席の歌》の間にパリ本（Ms276）の《神と舞姫》、《夜の歌》、《あこがれ》D310、《ミニョン》が挟まれることになる。つまり第Ⅱ巻は４分割され、第１部分と第３部分がウィーンに、第２部分と第４部分がパリにあるということなのだろうか。

マンディチェフスキーの記述は丁合という点で無理がある。ウィーン本（MH117）の電子データの画像を観察すると、１−４頁（《あこがれ》D123＝未完）は１折丁、５・６頁（《あこがれ》D123 最終頁、《誰が愛の神を買うのか？》）は単葉、９・10頁（《盟約の歌》）は７・８頁（《涙の中の慰め》）と11・12頁（《宴席の歌》、空欄）の折丁に挟まれた単葉ということがわかる。このような丁合の状態からみると、《盟約の歌》と《宴席の歌》だけをパリ本（Ms276）の後に置くことは不可能とはいわないまでも、かなり不自然な状態である。したがって、マンディチェフスキーの記述はフェルディナントの記述同様、曲順を示したものではないことになる。ただし、彼は《歌い手》が第Ⅱ巻最後の曲であるとはっきり述べている（Mandyczewsky 1897）。

パリ本（Ms276）は２つの折丁からなり、１・２頁と７・８頁の折丁の中に３・４頁と５・６頁の折丁を挟み込んだ状態である。そしてパリ本（Ms273）は３つの折丁からなり、１・２頁と11・12頁の折丁の中に３・４頁と９・10頁の折丁を、更にその中に５・６頁と７・８頁の折丁を挟み込んだ状態だという（Dürr　1978：53）。したがって、ウィーン本（MH117）とパリ本（Ms276）のどちらが先に置かれていたかという疑問は残るものの、とりあえず《あこがれ》D123、《誰が愛の神を買うのか？》、《涙の中の慰め》、《盟約の歌》、《宴席の歌》、《神と舞姫》、《夜の歌》、《あこがれ》D310、《ミニョン》、《月に寄せて》、《ねずみ取り》、《歌い手》という曲順が想定できる。

Ⅳ　『ゲーテ歌曲集』の役割

最後に、『ゲーテ歌曲集』が果たした役割とその性格について整理しておこう。

1816年の出版計画は、不首尾に終わったとはいえ、その後の出版を方向付けるものであった。一つの歌曲集を一人の詩人に充て、詩人毎の歌曲集としようとしたこと、その始まりをゲーテとしたことは1821年に始まる本格的な出版活動にも受け継がれた[10]。

Ⅳ―１　出版計画

ただし、この段階ではシューベルトの、あるいは友人達の見込み違いもあった。ゲーテから見向きもされなかったこともその一つであるが、歌曲集の規模について、彼らは大きな勘違いをしていたのである。『ゲーテ歌曲集』第Ⅰ巻は16曲（18曲？）、第Ⅱ巻は12曲（ライシッヒも入れるなら13曲）からなる大部の歌曲集である。ところが、21年以降の出版活動の中で、１冊に10曲以上を集めた歌曲集は《冬の旅 Winterreise》op.89, D911（第１部、第２部それぞれ12曲）に過ぎない（全体で20曲となる《美しき水車屋の娘 Die schöne Müllerin》op.25, D795 は５分冊であった）。《魔王》op.1 と《糸を紡ぐグレートヒェン》op.2 は長い曲であるとはいえ単独出版であったし、他の多くの歌曲集は３～４曲からなっている。つまり彼らは、19世紀初頭にウィーンで出版する歌曲集の適正規模を読み間違えたのである[11]。

また、採り上げる詩人についても誤算があった。シュパウンの手紙には、第１巻と第２巻がゲーテ、第３巻はフリードリヒ・フォン・シラー Friedrich von Schiller（1759–1805）、第４巻と第５巻がフリードリヒ・ゴットリープ・クロップシュトック Friedrich Gottlieb Klopstock（1724–1803）、第６巻はフリードリヒ・フォン・マティソン Friedrich von Matthisson（1761–1831）、ルートヴィヒ・クリストフ・ハインリヒ・ヘルティー Ludwig Christoph Heinrich Hölty（1748–76）、ヨーハン・ガウデンツ・フォン・ザリス＝ゼーヴィス Johann Gaudenz von Salis–Seewis（1762–1834）、第７巻と第８巻はオシアン Ossian[12]に充てられると書かれ、オシアンの巻は特に優れているとされている。いずれもシューベルトが好んで用いた詩人ではあるが、1816年当時の思惑通りに進んだのはゲーテとシラーだけであった[13]。ヘルティーこそ１曲《月に寄せて An den Mond》op.57,3, D193 が出版されているが、マティソンやザリス＝ゼーヴィス

10　シューベルトが自ら出版した歌曲集57集の内、２曲以上からなる曲集で全て同一詩人から歌詞を得ているものは21集であり、「詩人毎の歌曲集」という考え方が受け継がれていることがわかる。なお、その1/3の７集は「ゲーテ歌曲集」である。

11　ここで「ウィーンで出版する歌曲集の適正規模」と限定したのは、18世紀後半の北ドイツと、ウィーンのリート観に隔たりがあったからである。北ドイツでは啓蒙的、教育的目的を持ったジャンルとして18世紀中頃から大部のリート集が多数出版され、例えばヨーハン・フリードリヒ・ライヒャルト Johann Friedrich Reichardt（1752–1814）も40曲以上を収めた歌曲集を複数出版している（村田1985、村田2016）。

12　オシアンとはジェームズ・マクファーソン James Macpharson（1736–96）が古代ケルトに倣って書いた偽作詩の作者のことであり、シューベルトももちろん、真正な古代ケルト詩のドイツ語訳と思い込んでいた。当時の人気作家であったといえる。

13　シラーによる歌曲は全部で10曲が出版されている。しかしその最初は1823年に op.24,1 として出版された《タルタルスの群れ Gruppe aus dem Tartarus》D583 である。

はもとより、２巻が充てられるとされていたクロップシュトック、オシアンは生前に１曲も出版されていない[14]。これまた、読み違いであったといえる。これらの歌曲、特に「オシアン歌曲」は『遺作歌曲集』において人気作品として出版されることになる。

Ⅳ―２　『ゲーテ歌曲集』の役割

このような状況であったからなおさら、『ゲーテ歌曲集』第Ⅰ巻が果たした役割は大きい。第Ⅰ巻に収められた16曲中14曲は生前に出版され（《御者クロノスに》と《愛》を含めて18曲と考えるのなら出版は15曲）、しかもその多くが『ゲーテ歌曲集』を版下としている。つまり、最初の計画の５年後にもまだ出版活動の中心的役割を果たしたのである。シューベルトが丁寧に作成した甲斐があったというべきだろう。

『ゲーテ歌曲集』第Ⅰ巻に収められた歌曲の音楽構造を見ると、それは1815年頃のシューベルトが示していた様式に一致する。16曲中７曲が純粋有節形式により、３曲ある通作歌曲も元々の詩節構造に従った有節的通作と呼ぶべきものである（《羊飼いの嘆きの歌》、《糸を紡ぐグレートヒェン》、《魔王》）。それでいながら、彼が1813年頃にしばしば見せていたレチタティーヴォを組み込むという作風も捨てきれない（《亡霊の挨拶》）。そして、自由詩（各詩節の行数や律格、詩脚数はやや自由であるが脚韻を踏む韻文となっている詩型）への興味も示す（《静かな海》、《悲しみの喜び》、《旅人の夜の歌》、《最初の喪失》、《憩いなき愛》）[15]。まさに、1815年頃のシューベルトが示していた様式そのものといえる。

第Ⅱ巻を見ても同様のことがいえる。純粋有節形式の数は変わらず（12曲中８曲）、レチタティーヴォの組み込みも見られる（《あこがれ》D123、《歌人》）。第Ⅰ巻との違いは、有節的通作による歌曲が存在せず、自由詩も１曲に限られる（《あこがれ》D310[16]）ということである。一方で、変奏有節形式が１曲存在する（《ミニョン》）。

このように見ると、『ゲーテ歌曲集』は出版活動の出発点であっただけではなく、リート創作の原点でもあったということができるだろう。第Ⅰ巻の多くがシューベルトの生前に出版され、第Ⅰ巻の残りと第Ⅱ巻の大部分も「遺作番号付き」、あるいは『遺作歌曲集』として速やかに出版されたことに感謝したいものである。

おわりに

創作と出版の原点であったということが『ゲーテ歌曲集』が持つ意義であった。第Ⅰ巻はま

14　マティソンは四重唱曲が２曲、生前に出版されている。
15　欠落部分を補う曲と想定した《御者クロノスに》と《愛》はいずれも自由詩である。
16　《あこがれ》D310の詩型はヤンブス３詩脚とヤンブス２詩脚が交替する12行１節であるが、この詩に最初に音楽を付けたライヒャルトを始めとして、６行２節として作曲されることも多い。シューベルトはこの詩に６種類の音楽を付けているが、いずれも自由詩の扱いである。

さにその役割を全うし、第Ⅱ巻については「様子見」であったためか完成には至らず、後の本格的出版活動に活かされることもなかった。そうではあっても、『ゲーテ歌曲集』全２巻は、1816年から20年代前半にシューベルトが、そして彼の周辺にいて彼の音楽を楽しみ、彼を応援していた友人達が懐いていたリート観、出版の意義を反映した曲集であるということができるだろう。

この曲集については、既に十分に論じ尽くされたはずではあったが、改めて検討することによって、シューベルトと彼の時代のリート観をより鮮明に見ることができたように思う。それに加え、従来の論考に含まれる誤謬や曖昧な点を指摘し、修正できたことも大きな喜びである。

本稿を2018年１月６日に85歳で亡くなったヴァルター・デュル教授に献げる。

（本学教授＝音楽学担当）

引用文献／参照資料

Deutsch, Otto Erich

1928 *Schuberts zwei Liederhefte für Goethe* in: Die Musik ＸＸＩ, 31–37.

1957 *Schubert. Die Erinnerungen seiner Freunde*, Wiesbaden: Breitkopf & Härtel.

1964 *Schubert. Die Dokumente seines Lebens*, Kassel u.a.: Bärenreiter.

[2]1978 *Franz Schubert. Thematisches Verzeichnis seiner Werke in chronologischer Folge* （Neuausgabe）, Kassel u.a.: Bärenreiter.

Dürr, Walther

1972 *Neue Schubert–Ausgabe* Ⅳ 1 Kritischer Bericht, Tübingen: Internationale Schubert–Gesellschaft e V.

1977 *Neue Schubert–Ausgabe* Ⅳ 7 Kritischer Bericht, Tübingen: Internationale Schubert–Gesellschaft e V.

1978 *Aus Schuberts erstem Publikationsplan. Zwei Hefte mit Liedern von Goethe* in: Grasberger, Franz u. Wessely, Othmar （Hg.） *Schubert–Studien*, Wien : Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften, 43–56.

Dürr, Walther （Hg.）

1968 *Neue Schubert–Ausgabe* Ⅳ 7, Kassel u.a.: Bärenreiter.

1970 *Neue Schubert–Ausgabe* Ⅳ 1, Kassel u.a.: Bärenreiter.

1982 *Neue Schubert–Ausgabe* Ⅳ 3, Kassel u.a.: Bärenreiter.

1992 *Neue Schubert−Ausgabe* Ⅳ 13, Kassel u.a.: Bärenreiter.

2009 *Neue Schubert−Ausgabe* Ⅳ 8, Kassel u.a.: Bärenreiter.

2011 *Neue Schubert−Ausgabe* Ⅳ 9, Kassel u.a.: Bärenreiter.

Dürr, Walther u.a. （Hg.）

2012 *Schubert. Liederlexikon*, Kassel u.a.: Bärenreiter.

Hauschild, Peter （Hg.）

1978a *Franz Schubert. Sechzehn Goethe−Lieder*, Leipzig: Edition Peters. Faksimile−Ausgabe nach dem im Besitz der Deutschen Staatsbibliothek Berlin befindlichen Autograph, Wiedergabe im Originalformat.

Hauschild, Peter

1978b *Die Goethe−Lieder des jungen Schubert*, Beiheft zur Faksimile−Ausgabe Franz Schubert Sechzehn Goethe−Lieder nach dem Autograph der Deutschen Staatsbibliothek Berlin, Leipzig: Edition Peters.

Lachmann, Robert

1928/29 *Die Schubertautographen der Sraatsbibliothek zu Berlin* in: ZfMw Ⅺ, 109−119.

Mandyczewsky, Eusebius

1897 *Franz Schubert's Werke. Kritisch durchgesehene Gesammtausgabe. Revisionsbericht.* ⅩⅩ. Leipzig: Breitkopf & Härtel, 14 （Rep. 1965 New York: Dover Publications）.

村田　千尋

1985 「芸術リートの成立」『音楽学』第31巻第１号52−65.

1997 『シューベルトのリート　創作と受容の諸相』東京：音楽之友社.

2004 『シューベルト　作曲家◎人と作品シリーズ』東京：音楽之友社.

2012 「若きシューベルトの発想」『東京音楽大学研究紀要』第36集1−22.

2013 「シューベルトの悩み」『桐朋学園大学研究紀要』第39集37−54.

2016 「J.F.ライヒャルトのリート研究」『東京音楽大学研究紀要』第40集1−27.

Schubert, Franz（以下の電子データはいずれも2018年９月10日に最終閲覧）

Am Flusse, An Mignon, Nähe des Geliebten, Staatsbibliothek Berlin, mus.ms.autogr. Schubert F28,
http://digital.staatsbibliothek−berlin.de/werkansicht?PPN=PPN834542641&PHYSID=PHYS_0001&DMDID=DMDLOG_0001

Gretchen am Spinnrade, Wiener Stadt− und Landes Bibliothek, MH69/c,

http://www.schubert-online.at/activpage/manuskripte.php?top=1&werke_id=162&werkteile_id=&image=%27MH_00069_D118_001.jpg%27&aktion=blaettern&bild_id=0

Lieder-Heft für Goethe 1, Staatsbibliothek Berlin, mus.ms.autogr. Schubert 1,
http://digital.staatsbibliothek-berlin.de/werkansicht?PPN=PPN655180834&PHYSID=PHYS_0001&DMDID=DMDLOG_0001

Lieder-Heft für Goethe 2, Wiener Stadt- und Landes Bibliothek, MH117/c,
http://www.schubert-online.at/activpage/manuskripte.php?top=1&werke_id=244&werkteile_id=&image=%27MH_00117_D120_D123_D234_D258_D261_001.jpg%27&groesse=50&aktion=einzelbild&bild_id=0

Lieder-Heft für Goethe 2, Bibliothèque Nationale, Pairs, Ms276,
http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b520008502/f1.image

Szene aus Goethes Faust, Staatsbibliothek Berlin, Mus.ms.autogr. Schubert, F. 9,
http://digital.staatsbibliothek-berlin.de/werkansicht?PPN=PPN792135148&PHYSID=PHYS_0001&DMDID=DMDLOG_0001

Wiedersehen, Staatsbibliothek Berlin, Mus.ms. 20258,
http://digital.staatsbibliothek-berlin.de/werkansicht?PPN=PPN835193128&PHYSID=PHYS_0001&DMDID=DMDLOG_0001